

3回の実態調査とその指導実験による
Successful Language Learners' Strategies の検証

橋 堂 弘 文

**A Series of Descriptive Studies on Learning Strategies
Used by Successful Language Learners
in TEFL**

Hirofumi Kitsudo

Abstract

This study was designed to identify learning strategies that students could use to improve foreign language learning.

The purposes of this study were (a) to identify the types of learning strategies used by high school students who were successful and unsuccessful EFL learners, (b) to discover which strategies were associated with particular language learning activities and whether there were differences in strategy use between successful and unsuccessful EFL learners in TEFL, and (c) to consider the educational implications of this study.

Information was collected through questionnaires on the varieties of learning strategies used in different types of language learning activities by EFL students in senior high school. Also correlations between Language Learning Strategies which the students in the study always use and their EFL school evaluations were investigated.

Key words : learning strategy, reading aloud, successful language learners, 音読

(Received Sept. 30, 1994)

1. 0. は じ め に

我々教師の日々の授業実践において、自信を持って生徒に指導できる学習方法 (Learning Strategies) が、果たしていくつ有るだろうか。予復習や音読などにしても、我々の経験上有

効であると想像されるものであり、決して、学習成績に有意に作用すると検証されたものではない。そこで高校生が用いている学習方法を調査し、英語の学習成績と相関の有る Successful Language Learners の学習方法を統計的手段を用いて探ってみた。

本研究では、3回にわたる高校生に対する実態調査の結果（1988, 1989, 1991実施）と実験（1991実施）から、学校や家庭における高校生の実際の具体的な学習行動を、実験的コントロールを加えないでありのままの形でとらえ、現実の学習行動を教育的に改善する効果的な学習指導を考察したい。そして、高校生の Successful Learners と Unsuccessful Learners の英語学習に対する学習方法の相違を探り日常の英語指導や、学力差を踏まえた、習熟度を考慮した英語指導に活かそうとするものである。

1. 1. 本研究の目的

- (1) 高校生の使用している学習方法を明らかにする。
- (2) 特定の言語学習と結びつく学習方法を探る。
- (3) 各学習方法が、どういった言語能力に影響を与えているかを分析する。
- (4) 調査結果を踏まえて、指導実験を実施し上位群と下位群の両方の言語能力に貢献することを検証する。
- (5) 調査結果を指導に活かす方策を考察する。

1. 2. 調査項目

A：学習と学習計画 B：ノート・テーキング C：音読 D：暗唱 E：語彙学習
F：文法学習 G：Reading

1. 3. 成績資料

- (1) 英語の5段階評定 (2) 旺文社の大学入試模擬試験の下位項目（読解力、作文力、発音、文法力） (3) 英語II Bの語彙小テストの3回実施の平均点など

1. 4. 調査結果

音読など EFL の英語学習に特有の幾つかの学習方法が存在することが判明した。特に音読の中でも、「意味や構造を理解した上での音読（復習した上での音読など）」は、英語の5段階評定だけでなく（第1回 2回調査において）、旺文社の大学入試模擬試験の下位項目の読解力、作文力、発音、文法力（第2 & 3回調査）に、統計的に有意に作用していた。

（第1回目調査『昭和63年度大阪市内地留学報告書』1988／第2 & 3回調査『中部地区英語教育学会紀要』No. 19, 1990, & No. 21, 1992）

1. 5. 指導実験

そこで、音読の方法と効果に関して、さらに詳細に第3回目の調査を実施した。（『中部地区英語教育学会紀要』No. 21, 1992）そして、その結果を踏まえて、「意味や構造を理解した上での音読」の指導実験を実施し、それが上位群と下位群の両方の作文力向上に貢献することを検証した。（『教育学研究紀要』第37巻、中国四国教育学会、1992）

2. 0. ラーニング・ストラテジー研究について

まず、本研究で取り扱う「ラーニング・ストラテジー」に関して整理し、定義する。

2. 1. ラーニング・ストラテジーの定義

ラーナー・ストラテジー……学習者が実際に言語を学習するために使用している言語学習行為 (Anita L. Wenden, 1987)

ラーニング・ストラテジー……学習者が情報をインプットしたり、貯えたり、検索したりするための認知心理学で分類された手段

2. 2. ラーニング・ストラテジー指導の意義

Wenden (1985) の次の様な主張を待つまでもなく、学習方法の指導は、生徒の自主学習を可能とする重要な一要素である。

- (1) Learner strategies are the key to learner autonomy.
- (2) One of the goals of L2 training should be the facilitating of learner autonomy.
- (3) Learner strategies are a source of insight into the difficulties of unsuccessful L2 learners.
- (4) Teachers should become attuned to their students' learning strategies.

2. 3. ラーニング・ストラテジー研究

Oxford et al (1989) や O'mally (1985) は、ラーニング・ストラテジーを6つのカテゴリーに分けて分類整理している。

1. Metacognitive Strategies
2. Affective Strategies
3. Social Strategies
4. Memory Strategies
5. Cognitive Strategies
6. Compensation Strategies

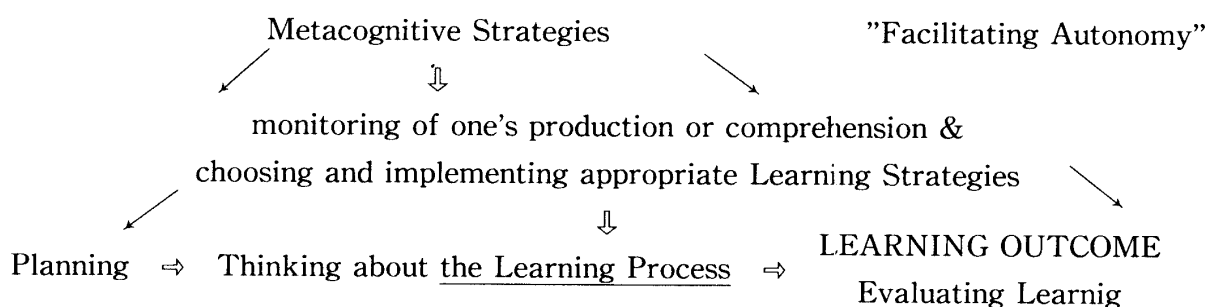
1～3……一般的な学習方法に関するもの

4～6……外国語学習に関係するもの

2. 4. 本研究におけるラーニング・ストラテジー

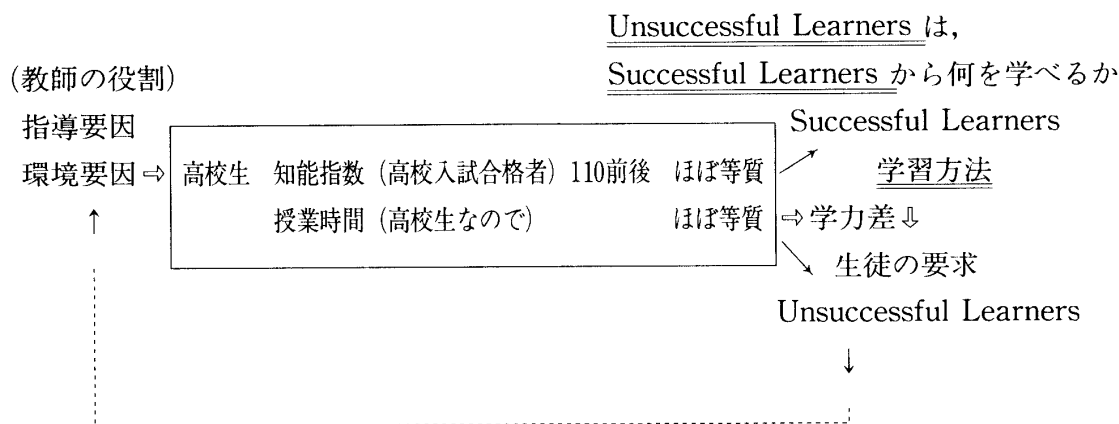
本研究で取り扱う「ラーニング・ストラテジー」は、フォーマルで教室や家庭にベースを置いた学習方法 (Bialystok, 1978) とする。

また、本研究は、言語学習に直接貢献する、直接的なストラテジーの内 (Rubin, 1987)、メタ・コグニティブとコグニティブなストラテジー (O'mally, 1985) を主に研究対象とする。間接的な貢献をするストラテジーは対象としない。



2. 5. 生徒の意識・態度を知る意義（仮説）

効果的なストラテジーを，効率の悪い EFL 学習者に指導するれば，学習の成就度が上がる。



英語の勉強の仕方はわかっていますか。

	%	評定 5	評定 4	評定 3	評定 2
よくわかっている		22.3	20.7	14.5	13.7
あまりよくわからない		70.3	76.2	69.1	50.0
全然わからない		<u>7.4</u>	<u>3.1</u>	<u>16.4</u>	<u>36.3</u>

(『昭和63年度大阪市内地留学報告書』より抜粋)

英語の学力差と英語の学習方法の理解は相関があり，全然わからないという項目に注目すると学力段階にしたがって，Unsuccessful Learners ほど多い。

3. 1. 研究目的

- (1) 高校生の使用している学習方法やそのプロシールを，上位群(Successful Learners)と下位群 (Unsuccessful Learners) に分け明らかにする。
- (2) 特定の言語学習と結びつく学習方法を探る。
- (3) 各学習方法が，どの言語能力に影響しているかを分析する。
- (4) EFL 環境に特有な学習のストラテジーを調査する。(第 2 回調査)
- (5) 音読の効果を調査する。(第 2 回調査・第 3 回調査へ)
- (6) その調査結果を指導に活かす方策を考察する。

3. 2. 研究仮説 (第 3 回調査1991と指導実験1991)

- (1) 「意味や構造を理解した上での音読」は，英語の 5 段階評定や，標準化されたテストの下位項目の読解力，作文力，発音に，統計的に有意差を作る傾向がある。
- (2) 学習者が，音読する文は，英語の言語能力の程度に応じて，コーヒアラントな意味のまとまりのある長い単位を処理する。

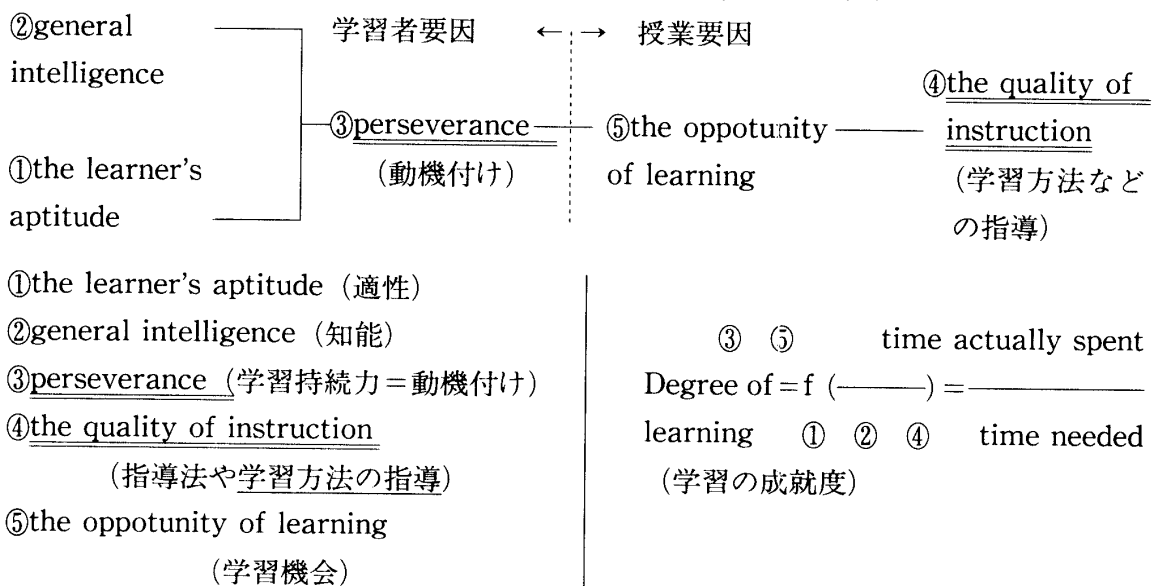
3 回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

1 文 < ディスコース < ストーリー

- (3) 上位群と下位群において、音読の方法の使用パターンと使用程度に差が存在する。
- (4) 授業や家庭学習においての「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱の実施は、英語の作文力（英語II C）養成に効果がある。（指導実験）

3. 3. 学習方法の指導の重要性

学習を成立させる基本的変数 Carroll (1974) ①~③学習者要因



3. 4. 調査変数の検討

同じ高校で調査するので、上記の (Carroll) の変数の内、

- ③perseverance は、motivation によって増減
 - ②general intelligence は、110前後でほぼ等質 (同一校入試合格者)
 - ⑤the opportunity of learning は、ほぼ等質 (同一高校内)
- そこで、②⑤がほぼ等質で、①③④が、変数となる。

4. 1. 被験者の英語の成績資料

- ① 英語の 5 段階評定 (1988年, 1989年, 1991年 調査で利用)
 - ② 標準化されたテストとして、旺文社の大学入試模擬試験の下位項目 (読解力, 作文力, 発音, 文法力 (1989年調査, 1991年調査))
 - ③ 英語II Bの授業中実施の語彙小テスト 3 回実施の平均点 (1989年)
- などを用い、学習方法と英語の成績との相関を探った。

5 段階評定は定期考査を基礎にしているので、短期間の retention に関わり、旺文社大学入試模試は、長期間の retention に関わると思われる。

5. 0. 本研究における3回の調査と指導実験の位置付け

5. 1. 研究段階

(1) Descriptive Study
(本研究の3回の調査)

↑

(必要条件)

(2) Longitudinal Study
(ケース・スタディー)

↓

(3) Course Development Study (十分条件)

(指導実験) - 「意味や構造を理解した上での音読」の効果

〈調査研究の目的〉

ラーニング・ストラテジー研究の目的は、最も効率的な EFL 学習者のストラテジーを発見し、これらの効率的なストラテジーを、効率の悪い EFL 学習者に指導する方法を明らかにすることにある。
(Anna Uhl Chamot et al, 1989)

5. 2. 本研究の限界

本研究は、調査研究として必要条件は満たしているが、十分条件は満たしていない。つまり、本研究は、あくまで学習者の実際に使用しているラーニング・ストラテジー（ラーナー・ストラテジー）の Descriptive Study 〈必要条件〉であり、記述調査したラーニング・ストラテジーが実際に指導して効果が有るかは、「意味や構造を理解した上での音読」の効果を除き、Course Development Study（指導実験）〈十分条件〉を待たねばならない。

但し、被験者は、卒業年度の全く異なる3年生130名以上であるにもかかわらず、調査結果に同じような傾向が毎回現れていることも見逃せない事実である。

また、本調査結果からは、複合的なラーニング・ストラテジーの使用は分からない。つまり、ラーニング・ストラテジーの同時使用の有無とその種類は分からない。本研究では、効果が有るとされるストラテジーを、指導実験で実験群と統制群に分けて、片方のグループに、あるストラテジーを指導せずにおく実験は、教育倫理上の観点からあえて差し控えた。しかし、音読・暗唱を授業で実施している私のクラスと、他の担当者のクラスの英語II C（英作文）の成績を利用して模擬実験を実施した。

6. 0. 研究経過

6. 1. 第1回目調査（1988）

第1回目の調査（1988年実施）は、「学力差の要因を英語学習に対する態度・意識・学習方法の実態調査から捉える」のテーマで、『昭和63年度内地留学生報告書』において報告した。そこでは、その調査結果と学力差との相関を見るための成績資料として、209名の英語の5段階評定を用いた。

6. 2. 研究目的

目的：学力差と関連の有る項目の調査（『昭和63年度大阪市内地留学報告書』）高校生の英語に対する学習意欲に関連すると思われる目的意識（動機付け）

3 回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

英語の学習方法、学習時間などを実態調査し、その結果と学習成績（5 段階評価）との関連を見る。そして、英語学習における Successful と Unsuccessful Learners の英語学習に対するストラテジーや意識・態度の相違を知る。

つまり、英語の学習に関する高等学校生徒の実態とその学習成績を調査し、次にその英語の学習意欲に関連すると思われる学習者の態度・意識や学習方法が、学力差に関連しているのかを分析した。そして、調査結果を Unsuccessful Learners（生徒達全て）に対して、学習意欲を喚起する指導法として活かす方策を考察した。

現在、高等学校で行われている評価が、5 段階評価であるので、その影響を調査した。しかしその評価が、生徒にとって理想的であるかどうかという問題は別である。

6. 3. 「英語学習についての実態調査」の実施方法（第 1 回調査）

実施日時 昭和63年11月30日（水）と12月2日（金）

実施場所 大阪市立A高等学校（普通科）

被験者 3年生209名（男子122名・女子87名）

所要時間 約40分

実施形態 質問紙法（但し、実施時に全問を読み上げ説明する）

選択形式（必ずその他の項目〈記述式〉を含む）と記述式

学習成績資料 被験者209名全員の第3学年の英語の学習評価（5段階）

評価	5	4	3	2	M	SD
人数 (%)	27(13.0)	63(30.1)	97(46.4)	22(10.5)	3.5	0.85

6. 4. 調査実施項目（昭和63年度『内地留学生研究報告書』大阪市教育委員会 pp. 43-56）

- 1) 英語学習の義務感について (選択形式)
 - 2) 英語学習の好き嫌いについて (選択形式)
 - 3) その時期 (選択形式)
 - 4) その理由 (記述形式)
 - 5) 英語学習の中で一番興味のあるもの (選択形式)
 - 6) 英語学習の目的について考えたことがあるか (選択形式)
 - 7) 英語学習の目的（動機付け） (選択形式)
 - 8) どの技能を獲得したいか（H, S, R, W） (選択形式)
 - 9) 英語を話す時の不安感 (選択形式)
 - 10) 高校3年間の成績変化（↑↓選択形式）と原因 (記述式)
 - 11) 英語学習がやる気に・いやになる時 (記述式)
 - 12) 授業以外の英語の学習時間（週何時間） (選択形式)
- ※13-A) 学習方法を知っているか (選択形式)
- ※13-B) 学習方法について（Good or Slow Learners） (選択形式)（t 検定）

- 15) AET の制度に賛成・反対 (選択形式) その理由 (記述式)
- 16) 音読・口頭での誤りの訂正方法 (文法上/発音面/選択形式)
- 17) 海外渡航の経験 (選択形式)
- 18) 授業以外での Native Speaker との会話の経験 (選択形式)
- 19) 教師の人柄によって学習意欲を左右された科目 (記述式)
- 20) 理想の英語教師の行動傾向 (参考文献 1 の質問項目に追加)
(選択形式) (Moskowitz)
- 21) 英語教育への希望 (授業/教師/教科書/その他) (記述式)

(4) 実態調査分析結果

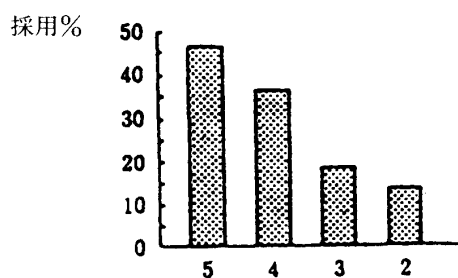
上記のように、21項目について学習成績との関連を見た。その中でも特に強く相関のあったものに、質問項目13-Bがあった。質問項目13-B43項目について、6. 7. に示しておく。

〈質問項目13-Bの評定段階別棒グラフ 6. 6. 調査結果の例〉No. 30のこのグラフ (『昭和63年度大阪市内地留学報告書』の一部, 1988) は、学習方法の各質問項目に Yes と答えた生徒の各評定別の人数の割合を%で示している。それを見ると各評定段階で、使用される学習方法に明らかに差異が存在することが分かる。

6. 6. 調査結果の例

Appendix I 〈例〉 30 〈ヒストグラム参照〉 (他のストラテジーに関しては Appendix I を参照)

(『昭和63年度内地留学生報告書』 p.51)
13-30. 英文は声に出して学習する (音読)
(図 1)



5 段階評定

〈例〉 $t = 3.54 ***$ 30. 英文は声に出して学習する
(t 検定 片側)

$p < .1$ $t = 1.28 : *$
 $p < .05$ $t = 1.65 : **$
 $p < .01$ $t = 2.34 : ***$

6. 7. 13-B.どのような英語の勉強方法をしていますか。

「採用している」・「していない」と答えた者の評定の平均の差の検定
 帰無仮説 H_0 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差はない
 対立仮説 H_1 : 学習方法の採否で、採用したグループの成績が上である。(片側検定)

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

有意水準： $p < .1$ ：*， $p < .05$ ：**， $p < .01$ ：***。で，帰無仮説を否定。（両側検定では，有意水準〈危険率〉が2倍になる）

- ① データの2群間の比較で，そのデータの尺度は間隔尺度（平均値）である。
- ② 母集団は正規分布であるとみなす。
- ③ 得られた2つの資料が独立である。（学習方法を取るか，取らないか）
- ④ 母分散が未知→全ての項目をF検定実施→2つの母分散が等しいと推定
- ⑤ $n_1 \neq n_2$ →t検定実施

〈t検定の後，有意差のあった項目〉

〈片側検定〉（ $p < 0.1 = *$ $t = 1.28$ ， $p < 0.05 = **$ $t = 1.65$ ， $p < 0.01 = ***$ $t = 2.34$ ）

- | | |
|----------|---|
| t = 1.25 | 1. 学習を計画的にする（少しでも毎日する） |
| -0.50 | 2. 気分ののった時に一気にする |
| -1.39 | * 3. <u>テスト直前にまとめて集中的に学習する</u> |
| 1.92 | ** 4. <u>予習を中心にする</u> |
| 1.73 | ** 5. <u>復習を中心にする</u> |
| 2.18 | ** 6. <u>ノートを必ずとり利用する</u> |
| -0.87 | 7. 難しい時ねばり強く最後までする |
| 1.09 | 8. 難しい時ヒントや答えを見て早く処理する |
| 1.13 | 9. 先生や友達に尋ねる |
| 0.83 | 10. 辞書をそのつど調べながら勉強する |
| 0.46 | 11. 知らない単語を気にせず，まず全体の意味をつかむようにする |
| 1.59 | * 12. <u>テストの誤りは，帰宅後もう一度答案を検討する</u> |
| 1.41 | * 13. <u>聞く練習をよくする（ラジオ・テレビ・教材テープなど）</u> |
| 0.79 | 14. 英語を話す練習をする（会話学校など） |
| 0.38 | 15. 英語を読む練習をする（小説や簡単な読み物など） |
| -0.09 | 16. 英語で作文する練習をしている（英文日誌など） |
| 0.86 | 17. 英文は暗唱をするようにしている |
| 1.60 | * 18. 多くのいろいろな問題を解く |
| 0.92 | 19. 基本問題中心にする |
| 2.08 | ** 20. 自分の意志で勉強方法を選択する |
| 0.22 | 21. 先生や友達の意見を参考にする |
| 0.33 | 22. 自分のペースを守って勉強する |
| 0.81 | 23. 先生や授業のペースに合わせる |

0.00	24. 文型・文法・単語は例文中で覚える
0.49	25. 文型・文法・単語はそれのみで覚える
-0.64	26. けじめをもってテレビなどがまんする
-0.32	27. 柔軟に学習時間を変える
-0.08	28. したくない時, むりにしない
2.70***	29. <u>教科書は何度も音読する</u>
<例> 3.54***	30. <u>英文は声に出して学習する</u> (7.8. 参照)
-0.08	31. 静かに学習する
1.86**	32. <u>新出単語は何度も書く</u>
1.16	33. 単語帳は必ず作り, 利用する
0.66	34. 友達を意識する (競争)
0.68	35. 友達と協力する
0.16	36. 自分一人で学習する
1.53	37. <u>塾・家庭教師を利用している</u>
2.38***	39. <u>反復学習する</u>
-0.81	40. 教科書中心に学習
-0.15	41. 参考書をよく利用する
1.30*	42. <u>月刊雑誌や教養図書を読む</u>
0.79	43. 通信添削をしている

また、質問項目13-B の表には、この学習方法の各項目で、Yes と答えた生徒の学習評定の平均と No と答えた生徒の学習評定の平均の差を、t 検定 (平均の差の検定) を用いて調査した結果が、各学習方法の項目の左に記載されている。簡単に説明すれば、*アスタリスクの数が、多くなればなるほど Successful Language Learners が採用しているストラテジーであり、英語学習に効果があると思われるものである。

6. 8. Successful Learners の学習方法の特徴

*** 29. <u>教科書は何度も音読する</u>	** 4. <u>予習を中心にする</u>
*** 30. <u>英文は声に出して学習する</u>	** 5. <u>復習を中心にする</u>
*** 39. <u>反復学習する</u>	** 6. <u>ノートを必ずとり利用する</u>
** 20. <u>自分の意志で勉強方法を選択する</u>	** 32. <u>新出単語は何度も書く</u>
* 12. <u>テストの誤りは、帰宅後もう一度答案を検討する</u>	
* 13. <u>聞く練習をよくする (ラジオ・テレビ番組・教材テープなど)</u>	
* 18. <u>多くのいろいろな問題を解く</u>	
* 37. <u>塾・家庭教師を利用している</u>	* 42. <u>月刊雑誌や教養図書を読む</u>

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

6. 9. Unsuccessful Learners の学習方法の特徴

-* 3. テスト直前にまとめて集中的に学習する

7. 0. 第2回目調査研究(1989)の目的

第2回目調査の結果、上表の調査結果に有るように、音読や反復練習、ノート・テーキング、予復習など、一般に効果があると言われている学習方法(12項目, $p < 0.1$)が検定結果として検証された。

前回の調査結果には、それぞれの学習方法の細かな点について(例えばノートのどのような取り方が効果的かなど)研究余地が残されていた。そこで、前回の調査で学力と相関の有った項目の内、学習計画、ノート・テーキング、音読、暗唱の方法と、語彙学習、文法学習、Readingの学習に関して71項目再調査してみた。

そこで、第2回目の調査(平成元年実施)は、第1回目の調査結果を踏まえて「英語の学習方法」に関してさらに詳細に再調査し、学習方法の採否の2つのグループ間の成績の平均の差が、統計的に有意であるかを分析した。第2回目の調査実施項目は、以下のA~Gであり、それをさらに、71項目に細分化した。

A: 学習と学習計画 B: ノート・テーキング C: 音読 D: 暗唱
E: 語彙学習 F: 文法学習 G: Reading

成績資料としては、189名の英語の5段階評定だけでなく、旺文社の大学入試模擬試験の下位項目(読解力、作文力、発音)と、英語IIBの語彙小テスト3回実施の平均点などを用いた。そして、学習方法と英語の成績との相関の調査結果を『中部地区英語教育学会紀要-第19号-』(1990)に、“Learning Strategies Used by Good Language Learners”として報告した。

7. 1. 英語の学習方法についての実態調査」の実施方法(第2回調査)

実施日時 平成元年6月12日(月)と6月14日(水)

実施場所 大阪市立A高等学校(普通科)

被験者 3年生 189名(男子82名・女子107名)

所要時間 約20分

実施形態 質問紙法(但し、実施時に全問を読み上げ説明する)選択形式

学習成績資料 被験者189名全員の第3学年の英語の学習評定(5段階)

評定(%)	5(8%)	4(21%)	3(56%)	2(15%)	M	SD
人数(男・女)	15(2.13)	40(7.33)	106(49.57)	28(24.4)	3.22	0.79
学習方法の指導をしてほしい	14(93%)	32(80%)	84(79%)	22(79%)		

(但し、語彙学習の成績資料は、英語IIBの英単語熟語テスト3回(5/10, 5/31, 6/14)実

施分の平均点20点満点を5点満点に勘算したものを利用)

5点満点 | 5点 15名 | 4点 53名 | 3点 54名 | 2点 45名 | 1点 22名 | 2.97 | 1.14

7. 2. 調査実施項目

「どのような英語の勉強方法をしていますか。」の質問に対して、「全くあてはまらない」「とてもよくあてはまる」という回答者の学習評定の平均の差の検定

(但し、語彙学習の成績資料は、英語IIBの英単語熟語テスト3回の平均点を5点満点に勘算したものをを用いた。)

帰無仮説 H_0 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差はない

対立仮説 H_1 : 学習方法の採否で、採用したグループの成績が上である。(片側検定)

有意水準: $p < .1$: *, $p < .05$: **, $p < .01$: ***. で、帰無仮説を否定。(両側検定では、有意水準〈危険率〉が2倍になる)

- ①データの2群間の比較で、そのデータの尺度は間隔尺度(平均値)である。
- ②母集団は正規分布であるとみなす。
- ③得られた2つの資料が独立である。(学習方法を取るか、取らないか)
- ④母分散が未知→全ての項目をF検定実施→2つの母分散が等しいと推定
- ⑤ $n_1 \neq n_2$ → t検定実施

〈片側検定〉($p < .1 = *$ $t = 1.28$, $p < .05 = **$ $t = 1.65$, $p < .01 = ***$ $t = 2.34$, $p < .005 \downarrow = ****$ $t = 2.60 \uparrow$)

A. (学習と学習計画)

	t =	Yesと答えた生徒 (学力差別使用状況)				F	A or R
		評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)		
1. 学習は計画的にする。	****	3.49	9 60	8 20	21 20	2 7	1.50 A
2. 気分ののった時一気にする。		-0.45	11 73	28 70	79 75	21 75	1.02 A
3. テスト直前にまとめて集中的に学習する。	**	-1.75	9 60	30 75	89 31	23 82	1.49 A
4. 柔軟に学習計画を変える。		0.17	8 53	22 55	55 18	15 54	1.03 A
5. 先生や授業のペースに合わせる。	***	2.52	13 87	21 53	63 59	10 36	1.2 A
6. 先生の意見を参考にペースを決める。	****	4.08	13 87	26 65	61 58	7 25	1.21 A
7. 友達の意見を参考にペースを決める。	**	1.70	5 33	10 25	28 26	2 7	1.14 A
8. 自分のペースを守ってする。	**	1.70	12 80	30 75	69 65	17 61	1.22 A
9. 自分の意志で勉強方法を選択する。		1.36	12 80	31 78	69 65	19 68	1.33 A
10. 先生の意見を参考に勉強方法を選択する。	****	3.28	14 93	33 83	73 69	15 54	1.5 A
11. 友達の意見を参考に勉強方法を選択する。	*	1.34	7 47	16 40	43 41	7 25	1.08 A
12. 予習を中心にする。	****	2.79	13 87	22 55	58 55	10 36	1.33 A
13. 予習で疑問点や注意すべきところをチェックする。	**	2.18	9 60	17 43	36 34	8 29	1.33 A
14. 復習を中心にする。		0.24	3 20	17 43	35 33	8 29	1.26 A
15. 反復学習する。	**	2.06	4 27	8 20	15 14	2 7	A
16. テストの誤りは、帰宅後もう一度答案を検討する。	**	2.04	2 13	11 28	14 13	1 4	1.42 A
17. 学習方法の指導をしてほしい。		1.02	14 93	32 80	84 79	22 79	1.35 A
18. 友達と一緒に協力して学習する。		-1.23	1 7	7 20	23 22	6 21	1.48 A

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

19. 塾・家庭教師を利用している。		-1.16	2 13	3 8	11 10	6 21	1.33	A	
20. 通信添削をしている。	****	5.92	1 7	37 93	9 8	2 7	1.97	R	
B. (ノート・テーキング)		t =	評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)			
21. ノートを必ず作る。	**	1.88	14 93	37 93	99 93	21 75	100	1.31 A	
22. 授業中ノートを取る。	****	3.32	15 100	39 98	102 96	21 75	100	1.33 A	
23. 授業中ノートに教師の指導事項を、全部記入する。	*	1.42	9 60	28 70	70 66	16 57	76	1.28 A	
24. 授業中ノートに教師の指導事項を、要点のみ記入する。	*	1.4	13 87	27 68	79 75	12 43	57	1.03 A	
25. 教科書の本文(英文)は必ずうつす。	***	2.43	13 87	24 50	64 60			1.26 A	
26. 全文和訳を書く。	**	1.82	13 87	36 90	92 67	19 68	90	1.25 A	
27. 英文の大意や要点のみ書いておく。		-0.54	4 27	11 28	28 26	10 36	48	1.12 A	
28. 重要構文や新出語彙を記入する。	****	2.83	14 93	34 85	79 75	17 61	81	1.38 A	
29. 予習で疑問点を記入しておく。	****	2.84	7 47	15 38	17 16	6 21	29	1.60 A	
30. 別に単語帳やカードなど作り利用する。	****	4.44	12 80	25 63	46 43	6 21	29	1.35 A	
32. ノートに棒線や記号、図を用いて記入する。	***	2.51	13 87	26 65	69 65	13 46	62	1.35 A	
33. 復習にも必ず利用する。	****	2.97	13 87	36 90	83 78	16 57	76	1.03 A	
C. (音読)		t =	評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)			
34. 教科書は何度も音読する。	*	1.39	4 27	16 40	26 25	6 21		1.02 A	
35. 英文はできる限り声に出して学習する。	*	1.45	8 53	22 55	46 43	10 36		1.02 A	
36. 声を出さず静かに学習する。		-0.69	8 53	17 43	53 50	16 57		1.1 A	
37. 意味を考えながら音読する。	****	2.97	10 67	30 75	52 49	11 39		1.18 A	
38. 予習で音読する。		0.38	2 13	7 18	18 17	3 11		1.18 A	
39. 復習で音読する(意味や構造を理解した上での音読)	***	2.53	8 53	25 63	45 42	9 32		1.05 A	
40. 予・復習で音読する。		0.35	5 33	9 23	16 15	9 32		1.66 A	
D. (暗唱)		t =	評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)			
41. 暗唱は必ずする。	*	1.35	7 47	19 48	40 38	9 32		1.07 A	
42. 英文は声に出して暗唱するようにしている。	****	2.72	11 73	26 65	52 49	11 39		1.28 A	
43. 英文は声を出さずに暗唱するようにしている。		-0.23	5 33	8 20	30 28	8 29		1.10 A	
44. 音読はするが、暗唱はしない。	*	1.37	4 27	8 20	26 25	3 11		1.48 A	
45. 一文を暗唱する。	***	2.45	9 60	28 70	61 58	9 32		1.18 A	
46. まとまった文章(教科書本文など)を暗唱する。		1.20	2 13	12 30	23 22	11 39		1.05 A	
47. 意味を考えながら暗唱する。	***	2.38	11 73	29 73	61 58	13 46		1.61 A	
E. (語彙学習) テスト平均20点満点を5点に勘算		t =	5点15名	4点53名	3点54名	2点45名	1点22名		
48. 単語・熟語はそれのみで覚える。		0.14	10 67	43 81	47 87	38 84	15 68	1	A
49. 単語・熟語は例文中で覚える。		-1.18	8 53	18 34	20 37	20 44	13 59		1.07 A
50. 単語・熟語は教科書の本文の暗唱と同時に覚える(文脈中)		0.95	10 67	21 40	26 48	18 40	9 41		1.05 A
51. 単語は派生語などから連想して覚える。◆◆◆	***	2.37	8 53	18 34	10 19	11 24	4 18		1.08 A
52. 単語は派生語も一緒にして覚える。	****	3.70	8 53	18 34	12 22	7 16	2 9		1.02 A
53. 新出単語は何度も書く。★★★	**	1.95	11 73	31 58	38 70	26 58	8 36		1.30 A
54. 新出単語は声を出して何度も書く。★★★	**	1.72	8 53	23 43	25 46	16 36	6 27		1.09 A
55. 単語帳やカードは必ず作り、利用する。◆◆◆	****	3.27	5 33	31 58	20 37	11 24	4 18		1.26 A
(48-55の番号の★★★や◆◆◆は、成績資料として5段階評定を用いて、 $p < .01 = \text{◆◆◆}$ で有意差のあった項目)									
F. (文法学習)		t =	評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)			
56. まず文法規則を覚えて英作や解釈に利用している(演繹)	****	3.48	11 73	34 85	65 61	11 4		1.03 A	

57. 数多くの英文から文法規則を見つけるようにしている (帰納)	****	2.88	6 40	16 40	17 16	5 18	1.38	A
58. 例文とともに文法規則を覚える。	**	1.74	11 73	32 80	72 68	16 57	1.02	A
59. 教科書中心に学習する。		-0.61	10 67	27 68	83 78	19 68	1.35	A
60. 多くのいろいろな問題を聞く。	***	2.45	4 27	11 28	11 10	3 11	1.29	A
61. 基本問題中心にする。		0.67	11 73	36 90	85 80	21 75	1.25	A
62. 参考書をよく利用する。		0.37	3 20	14 35	21 20	8 29	1.11	A
G. (Reading)		t =	評定5(%)	評定4(%)	評定3(%)	評定2(%)		
63. 辞書を利用して知らない単語を調べてから意味を取る。		0.68	14 93	31 80	86 81	22 79	1.15	A
64. 文脈 (文章の筋の流れ) に合った語句の意味を辞書で調べる。		1.09	10 67	28 70	55 52	17 61	1.32	A
65. 文脈 (文章の筋の流れ) から新出単語の意味を推測する。	*	-1.40	5 33	5 13	33 31	10 36	1.08	A
66. 派生語から新出語の意味を推測する。	****	-3.06	5 33	12 30	23 22	12 43	1.44	A
67. 内容理解に関係の無い語句は無視して読む。		-0.80	4 27	12 30	32 30	11 37	1.05	A
68. 内容理解のため自分の知っている背景知識を利用する。		-0.42	6 40	12 30	50 47	9 32	1.26	A
69. タイトルを手がかりにする。		-0.69	6 40	15 38	51 48	12 43	1.16	A
70. 知らない単語は気にせず、まず本文全体の意味をつかむ。		-0.57	5 33	8 20	31 29	8 29	1.08	A
71. 一文一文の意味をとらえてから、本文全体の意味をつかむ。	****	4.82	11 73	33 83	71 67	21 75	1.18	A
72. まず必ず和訳する。	***	2.45	13 87	34 85	62 58	19 68	1.90	R

7. 3. 調査結果の分析

<本研究の目的> ① 特定の言語学習と結びつく学習方法を探る。

② 各学習方法が、どの言語能力に影響を与えているかを分析する。

(1). 5段階	評定 (%)	5 (8%)	4 (21%)	3 (56%)	2 (15%)	全国模試 ・ 男43女59 ・ 102名
	人数(男・女)	15(2.13)	40(7.33)	106(49.57)	28(24.4)	
学習方法の指導をしてほしい		14(93%)	32(80%)	84(79%)	22(79%)	

旺文社大学入試

(2). 2つの平均値の差の検定

帰無仮説 H_0 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差はない。

対立仮説 H_1 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差が有る。(両側検定)

有意水準: $p < .1$: *, $p < .05$: **, $p < .01$: ***, $p < .005$: ****で、帰無仮説を否定。

- ① データの2群間の比較で、そのデータの尺度は間隔尺度(平均値)である。
- ② 母集団は正規分布であるとみなす。
- ③ 得られた2つの資料が独立である。(学習方法を取るか、取らないか)

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

④ 母分散が未知→全ての項目をF検定実施→2つの母分散が等しいと推定

⑤ $n_1 \neq n_2 \rightarrow t$ 検定実施

(3). Successful Language Learners の学習方法の特徴

(読解力・作文力・発音・文法力は、旺文社大学入試・全国模試・102名平成元年5/28実施分利用)

C. (音読)	5段階評定	旺文社大学入試模擬試験下位項目			
		読解力40点満点	作文力20点満点	発音20点満点	
34. 教科書は何度も音読する。	NS 1.39	NS	** 2.15	NS	
35. 英文はできる限り声に出して学習する。	NS 1.45	NS	NS	* 1.77	
37. 意味を考えながら音読する。……	**** 2.97	* 1.71	* 1.76	NS	
39. 復習で音読する (意味や構造を理解した上での音読)	** 2.53	* 1.82	*** 2.63	*** 2.63	

E. (語彙学習)

51. 単語は派生語などから連想して覚える。	***	2.64	**	2.37	<両側検定> 有意差無し : NS $P < .1$ $t = 1.66$: * $P < .05$ $t = 1.98$: ** $P < .01$ $t = 2.62$: *** $P < .005$ $t = 2.87$: ****
52. 単語は派生語も一緒にして覚える。	NS	1.55	****	3.70	
53. 新出単語は何度も書く。	*	1.79	*	1.95	
54. 新出単語は声を出して何度も書く。	*	1.80	*	1.72	
55. 単語帳やカードは必ず作り、利用する。	****	3.50	****	3.27	

F. (文法学習)

文法力 20点満点

56. まず文法規則を覚えて英作や解釈に利用している (演繹)	****	3.48		NS
57. 数多くの英文から文法規則を見つけるようにしている。	****	2.88	*	1.90
58. 例文とともに文法規則を覚える。	*	1.74		NS
60. 多くのいろいろな問題を解く。	**	2.45		NS
61. 基本問題中心にする。				NS 1.32

G. (Reading)

読解力←問題の難易度が高く、得点差がほとんど無かった。

63. 辞書を利用して知らない単語を調べてから意味を取る。				
	NS		NS	-1.13
64. 文脈 (文章の筋の流れ) に合った語句の意味を辞書で調べる。	NS		NS	1.31
65. 文脈 (文章の筋の流れ) から新出単語の意味を推測する。	NS	-1.40	NS	-1.02
66. 派生語から新出語の意味を推測する。	****	-3.06	NS	0.38
67. 内容理解に関係の無い語句は無視して読む。	NS		*	-1.67
68. 内容理解のため自分の知っている背景知識を利用する。	NS		*	-1.79
69. タイトルを手がかりにする。	NS		NS	0.25
70. 知らない単語は気にせず、まず本文全体の意味をつかむ。	NS		NS	-0.38

71. <u>一文一文の意味をとらえてから、本文全体の意味をつかむ。</u>	****	4.82	NS	0.31
72. <u>まず必ず和訳する。</u>	**	2.45	NS	1.29

8. 0. 第3回目調査研究（1991）へ向けての第3回目調査の分析

過去2回の調査の結果からは、音読など EFL の英語学習に特有の学習方法が存在することが判明した。特に音読の中でも、「意味や構造を理解した上での音読(復習した上での音読など)」は、英語の5段階評定だけでなく(第1&2回調査)、旺文社の大学入試模擬試験の下位項目の読解力、作文力、発音、文法力に、統計的に有意に作用していた。

8. 1. 音読の効果を調査する。(第3回目調査)(Reading Aloud に関して)

Reading といえば、普通英文を読んで理解すること (reading for meaning) と定義される。しかし日本のような英語教育 (TEFL) では、Reading を通じて英語をインプットし、発話力を養成する方法を模索することも必要である。作者の意図、伝達内容、登場人物の心情などのいわゆるディスコースの意味と、コーヒアランス、発音、イントネーション、文法、などの理解を充分した上で、何度も音読することは、発話力の養成につながるように思われる。

West (1960) は、“surrender value” が最も大きい言語技能として読む技能を上げ、その指導技術の中で特に特有用なもの1つとして、Promted Speech を取り上げている。それは、“Read and Look Up” と併用して生徒の読みを促進するものであった。

この種の音読の延長線上に、国弘正雄氏の「只管朗読」、近江誠(1988, 1984)のオーラル・インタープリテーション(表現読み)、松本享の基本的な文章の暗記などの主張があるように思われる。

しかし、こういった主張も、音読文の長さや音読から暗唱、暗写までの必要性という点では、意見を異にしている。また音読の方法も、reading aloud, read and look up, recitation, oral interpretation と種々様々である。

8. 2. 第三回目までの調査結果の課題

第3回目までの研究は、あくまで学習者の実際に使用しているラーニング・ストラテジー(ラーナー・ストラテジー)の Descriptive Study (必要条件)であり、記述調査したラーニング・ストラテジーが実際に指導して効果が有るかは、Course Development Study (指導実験) (充分条件)を待たねばならない。

しかし3回の調査の被験者は、卒業年度の全く異なる3年生130名以上であるにもかかわらず、調査結果に「意味と構造を理解した上での音読が読解力、作文力、発音に有効である」傾向が毎回現れていることも見逃せない事実である。音読訓練は、英語の暗唱小テストで one sentence のレベルであるが利用し、継続中であり、一定の効果をあげている。

そこで本研究では、その授業実践を利用し指導実験とし、その効果を検証したい。音読・

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

暗唱の具体的な方法に着いても調査してみた。

〈研究仮説〉

- (1). 意味や構造を理解した上での音読は、英語の5段階評定、標準化されたテストの下位項目の読解力、作文力、文法力に、統計的に有意差を作る傾向がある。(再調査)
- (2). 学習者が、音読する文は、英語の言語能力の程度に応じて、コーヒアラントな意味のまとまりのある長い単位を処理する。
1文 < ディスコース < ストーリー
- (3). 上位群と下位群において、各学習方法の使用パターンと使用程度に差が存在する。
- (4). 授業や家庭学習における「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱の実施は、英語の作文力（英語II C）養成に効果がある。

8. 3. 2つの平均値の差の検定（読解力・作文力・発音・文法力は、旺文者大学入試・全国模試・102名平成元年5/28実施分利用）

帰無仮説 H_0 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差はない。

対立仮説 H_1 : 学習方法の採否で、2つのグループ間の成績に差が有る。(両側検定)

有意水準: $p < .1$: *, $p < .05$: **, $p < 0.1$: ***, $p < .005$: ****で、帰無仮説を否定。

- ①データの2群間の比較で、そのデータの尺度は間隔尺度（平均値）である。
- ②母集団は正規分布であるとみなす。
- ③得られた2つの資料が独立である。(学習方法を取るか、取らないか)
- ④母分散が未知→全ての項目をF検定実施→2つの母分散が等しいと推定
- ⑤ $n_1 \neq n_2$ → t検定実施

(5段階評定は定期考査を基礎にしているので、短期の retention に関わり、旺文社大学入試は、長期の retention に関わると思われる)

	旺文社大学入試模擬試験下位項目			74名受験
	読解力45点満点	文法40点満点	作文力40点満点	
(音読)				
6. 文法(特に語順)を意識して音読する。	1.64	NS	**	2.03
11. 特に意味を考えながら音読する。	NS	NS	**	2.37
12. <u>意味や構造を理解した上での音読</u>	***	2.83	NS	1.47
(暗唱)				
38. <u>意味や構造を理解した上での暗唱</u>	NS	**	2.07	NS
(暗写)				
43. 暗唱した文は、書くようにしている。	*	1.89	NS	***

〈両側検定〉
 有意差無し : NS
 p < .1 t = 1.66 : *
 p < .05 t = 1.99 : **
 p < .01 t = 2.64 : ***

英語 II B (読解) < * → p < .05 = 1.98, ** → p < .01 = 2.61, *** → p < .001 = 3.37 >

英語 II B		n	M	SD	F	p < 5% AorR	t	p < 5% 1.98	p < 1% 2.61
A. 〈音読〉									
5. 意味を考えながら音読する。 *	Yes	71	3.79	0.86	1.17	A	2.50	R	NS
	No	63	3.40	0.93				*	
6. 文法 (特に英語の語順を意識して) 音読する。 **	Yes	27	4.04	0.76	1.42	A	2.80	R	R
	No	107	3.50	0.92					**
7. 発音に注意して音読する。 ***	Yes	45	3.8	0.87	1.12	A	1.74	NS	NS
	No	89	3.51	0.92					
B. 〈暗唱〉									
32. 暗唱は必ずする。 ***	Yes	64	3.91	0.83	1.17	A	3.84	R	R
	No	70	3.33	0.90					***
33. 英文は声にして暗唱するようにしている。 *	Yes	70	3.74	0.83	1.37	A	1.85	NS	NS
	No	64	3.45	0.97					

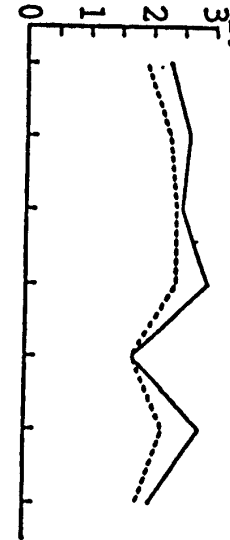
英語 II C		n	M	SD	F	p < 5% AorR	t	p < 5% 1.98	p < 1% 2.61
A. 〈音読〉									
6. 文法 (特に英語の語順) を意識して音読する **	Yes	27	3.96	0.81	1.32	A	2.75	R	R
	No	107	3.35	1.07					**
7. 発音に注意して音読する。 ***	Yes	45	3.69	0.92	1.40	A	1.72	NS	NS
	No	89	3.36	1.10					
11. 特に意味を考えながら音読する。 *	Yes	29	3.17	1.07	1.09	A	1.72	NS	NS
	No	105	3.55	1.04					
B. 〈暗唱〉									
32. 暗唱は必ずする。 ***	Yes	64	3.88	1.02	1.15	A	4.55	R	R
	No	70	3.1	0.95					***
33. 英文は声に出して暗唱するようにしている。 *	Yes	70	3.65	0.96	1.37	A	2.10	R	NS
	No	64	3.27	1.12				*	
43. 暗唱した文は書くようにしている。 *	Yes	95	3.6	1.00	1.25	A	2.27	R	NS
	No	39	3.15	1.11				*	

上位群と下位群の学習方法の使用パターンと使用程度 (他のストラテジーに関しては, Appendix II)

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

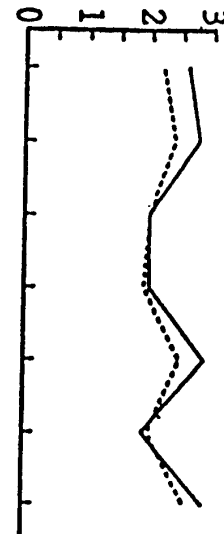
C. (音読)

- 34. 教科書は何度も音読する。
- 35. 英文はできる限り声に出して学習する。
- 36. 声を出さず静かに学習する。
- 37. 意味を考えながら音読する。
- 38. 予習で音読する。
- 39. (意味や構造を理解した上での音読)
- 40. 予・復習で音読する。



D. (暗唱)

- 41. 暗唱は必ずする。
- 42. 英文は声に出して暗唱するようにしている。
- 43. 英文は声に出さずに暗唱するようにしている。
- 44. 音読はするが、暗唱はしない。
- 45. 一文を暗唱する。
- 46. まとまった文章（教科書本文など）を暗唱する。
- 47. 意味を考えながら暗唱する。



上位群と下位群の音読・暗唱の学習方法の使用パターンと使用程度（前ページ第2回目調査資料参照）。実線は上位群（3年英語評定4&5の者）、破線は下位群（3年英語評定3&2の者）を表し、4ポイントの意味尺度テストの各群の平均をグラフ化した。上位群も下位群も1文は暗唱するが、まとまった教科書本文などは暗唱していないことが分かる。

9. 0. 「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱の指導実験（1991）

3回の調査結果から得たデータをもとに、次のような実験仮説をたて指導実験を試みた。

(1). 実験仮説

授業や家庭学習における「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱の実施は、英語の

作文力（英語II C）養成に効果がある。

(2). 被験者

被験者は、大阪市立の普通高等学校3年生93名

(3). 手順

過去3回の調査結果から得たデータをもとに、5. 1. の実験仮説をたて指導実験を試みた。

9. 1. 指導実験の方法

(1). 実験群（1クラス）と統制群（1クラス）を用い、英語II C（英作文）の授業において、「意味と構造を理解した上での音読」を、教科書の例文（one sentence）を利用して行い、その例文の音読・暗唱を宿題として課し、次回の授業でチェックした。

実験以外の要因が入らなかったかは、被験者と面接し確認した。その結果、欠席の多い者や家庭教師などに教科書の復習を以来している者を除外した。（実験群1名、統制群2名）

(2). ポスト・テスト（教科書と応用問題／各50%出題）を2回実施して（ポスト・テスト1〈5月中旬実施〉とポスト・テスト2〈7月初旬実施〉）、実験群と統制群の間でt検定を用い統計的に有意な差があるか確認し、さらに、その両群の上位群と下位群の間で、t検定を用い統計的に有意な差があるかを確認した。

9. 2. プリ・テスト（英語II C）による実験群と統制群の等質性の確認

まず、プリ・テスト（英語II C作文実力テスト）による実験群と統制群の等質性の確認を実施した。

(1)英語II C（プリ・テスト）の実力テスト(100点満点)を、10クラスに実施し、英語II Cを自分が指導するクラスと、「音読・暗唱」を課していない他の英語II C担当者の平均点の似たクラスを1つ取り、統制群にした。その際平均点だけでなく、F検定を実施して2つのクラスの母分散が等しいかを確認し、そしてさらにt検定（両側）を実施し、2つのクラスの平均点の差（1点）が統計的に有意な差でないことを確認した。（ポスト・テスト全体群の検定方法でも採用した）

(2)このプリ・テスト（英語II C）の成

プリ・テスト（4月13日実施）

全体	N	X	S.D.	t	p<
実験群	47	30	11	.47≤1.98	.05 N.S.
統制群	46	29	9		
上位群	N	X	S.D.	t	p<
実験群	24	38	11.7	.69<1.72	.01 N.S.
統制群	22	36	7.1		
下位群	N	X	S.D.	t	p<
実験群	23	22.5	2.4	.04<2.81	.01 N.S.
統制群	24	22.3	4.3		

(p<.1:*, p<.05:**, p<.01:***, p<.001:****)

プリ・テストを利用

上位群 24名-----

3 回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

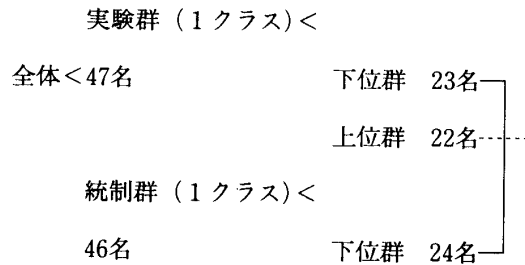
績をもとにして、各実験群と統制群を、さらに上位群と下位群の 2 グループに分けた。上位群の実験群と統制群と下位群の実験群と統制群の間の等質性は、コクランの法（両側）を利用して、統計的に有意な差がないことを確認した。

9. 3. 指導実験の考察

右表が示すように、実験群全体ではポスト・テスト 1 (P<.01) とポスト・テスト 2 (P<.05) とも実験群と統制群の間に有意差が見られ、Reading Aloud の作文力に対する効果が検証された。同じく上位群でも、ポスト 1 (P<.001) とポスト 2 (P<.05) とも有意差がみられた。しかし、下位群では音読を始めて 1 ヶ月後のポスト 1 (NS) では有意差が認められず、3 ヶ月後のポスト 2 (P<.1) で有意差が確認された。(下表参照)以上のことから実験群のどの群 (全体・上位群・下位群)においても音読の作文力に対する効果が確認され、実験仮説は検証された。

習熟度別で見れば、上位群は下位群よりも t 値が高くなっている。これは家庭での音読練習の頻度の差か内在化能力の差と思われる。また下位群は、音読訓練実施 1 ヶ月後のポスト・テスト 1 で、有意差 (P<.1) が無かったが、原因は、下位群が最初の 1 ヶ月間、授業以外の音読練習をしなかったのではないかと思われる。

9. 4. 指導実験の仮説の検証



ポスト・テスト 1 (5月中旬実施 中間考査)					
全体	N	X	S.D.	t	p <
実験群	47	49.2	22.8	2.99 > 2.70	.01 ***
統制群	46	36.5	17.3		
上位群	N	X	S.D.	t	p <
実験群	24	60.1	19.9	3.89 > 3.78	.001 ***
統制群	22	40.3	13.5		
下位群	N	X	S.D.	t	p <
実験群	23	38	20	.85 < 1.72	.1 N.S.
統制群	24	33	19.6		
ポスト・テスト 2 (7月初旬実施 期末考査)					
全体	N	X	S.D.	t	p <
実験群	47	54.5	22.2	2.69 > 1.99	.05 **
統制群	46	42.3	21.0		
上位群	N	X	S.D.	t	p <
実験群	24	55.7	22.8	2.12 > 2.07	.05 **
統制群	22	42.9	17.1		
下位群	N	X	S.D.	t	p <
実験群	23	53.4	21.4	1.72 > 1.71	.1 *
統制群	24	41.7	24.1		

注) 上位群・下位群の検定はコクランの両側を利用

以上、実験群の全体・上位・下位群も、授業や家庭学習において「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱の実施は、英語の作文力（英語II C）養成に効果があるという実験仮説は検証された。

10. 0. 3 回の調査結果と指導実験からの考察

10. 1. Reading Aloud

- (1) 意味や構造を理解した上での音読訓練の有効性（資料A 参照）
- (2) 文レベルの暗唱の効果（資料B 参照）
 - 〈仮説〉 1文 < ディスコース < ストーリー（第3回調査へ 1991）
- (3) 反復練習（習慣形成理論）→ 暗唱
- (4) 音声面での練習 反対意見一速読の妨げ（上級者）
- (5) 現在、音読暗唱小テスト（英語II C）に利用している。
 - “Read and Look Up” の利用（Michael West, 1960）

reading aloud < read and look up < recitation < oral interpretation

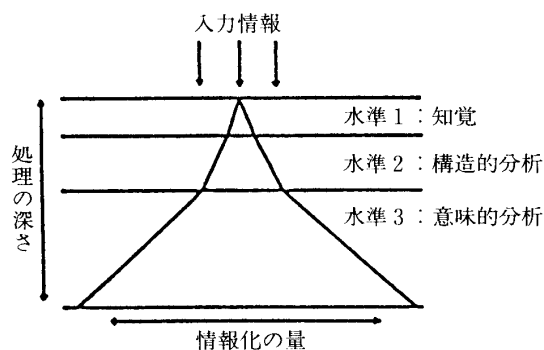
- (6) 上位群と下位群において、各学習方法の使用パターンと使用程度に差が存在する。

〈研究仮説〉 は、(2)以外、(1)(3)(4)は検証された。

- (1) 意味や構造を理解した上での音読は、英語の5段階評定、読解力、作文力、発音、文

資料A

意味や構造を理解した上での記憶

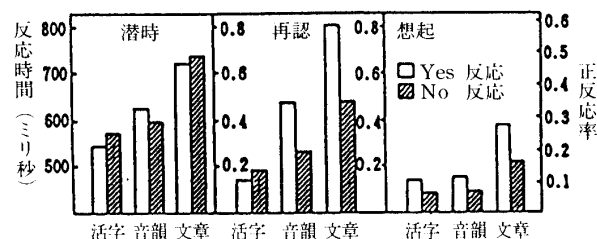


処理の水準、情報の情報化および記憶との関係 (Morgan, et al., 1975)

処理水準が最も浅い水準1では情報化の量が最も少なく、記憶量も最も低い、水準2では情報化の量も記憶量も増加する。水準3では記憶量が最も高い。

資料B

文レベルの暗唱の効果



処理水準と反応潜時、再認、想起との関係

(Kintsch (1977), Craik & Tulving (1975) の実験1と2に基づく)

処理水準が活字→音韻→文章処理へと深くなるほど、情報処理に用いる時間(潜時)も増加しており、同時に、再認と想起における正反応率が次第に上昇している。

3 回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

法力に統計的に有意差を作る傾向がある。

- (2) 学習者が、音読する文は、英語の言語能力の程度に応じて、コーヒアラントな意味のまとまりのある長い単位を処理する。⇒上位も下位も 1 文音読を音読する傾向あり。
1 文 < ディスコース < ストーリー
- (3) 上位群と下位群において、各学習方法の使用パターンと使用程度に差が存在する。
- (4) 授業や家庭学習における「意味や構造を理解した上での」音読・暗唱・暗写の実施は、上位群と下位群の両方の英語の作文力（英語 II C）養成に効果がある。

10. 2. Reading

質問項目 68, 69 を見ると、スキーマを利用したインファレンスまで、30%~40% の生徒たちが至っていない。この理由には、以下の(1)(2)(3)などが考えられる。しかし一方では、質問項目（71. 一文一文の意味をとらえてから、本文全体の意味をつかむ）や（72. まず必ず和訳する）などに、有意差が現れており、第 2 章の 5 段階評定の分布表を見ても、どの評定の段階でも 70~80% の生徒が利用している。これは、日常の授業方法の影響であろう。

- (1) 語彙数の圧倒的不足から、スキーマを利用した Inference まで至らないのではないか。
(図 A：文脈理解 参照←省略)
- (2) L1 の Reading Strategies が、トランスファーしない。
スキーマを利用した Inference ができない。(Clark, 1979)
Clark (1979) referred to this non-transfer of good reading strategies from L1 to L2 as the “short circuit” and ascribed it to limited command of the language.
- (3) Reading Strategies を知らない。
〈Teaching Strategies〉 ① Titles ② Pre-reading questions ③ Giving Shchema ④ Flow-charts and Hierarchical Summaries を利用。

10. 3. 語彙

アジアの学習者は、Rote Learning (Repetition) を用いる傾向有り、Grouping や Imagery を用いない。(O'Malley, 1985) ない。

質問項目 51, 52 の派生語やグルーピングによる学習も、5 段階評定、語彙小テストに有効である。第 2 章の 5 段階評定の分布表を見ると、Successful Learners ほど利用している。単語帳やカードの効用も見逃せない。

文法・単語の学習方法に関しては、文法そのものの理解と、文法の生かし法の両面から具体的な指導法を考える必要がある。単語の暗記に関しても、何を暗記すべきなのか、理解すべきなのかということをも具体的に示す必要がある。個々の生徒の学習法や学力差に応じた指導法の対応が必要である。

11. 0. まとめ

(1) どの項目も、英語指導の影響が強く出ていると思われる。

調査結果を見て強く思うのは、Successful と Unsuccessful Learners によるストラテジーの相違よりも、むしろ Successful Learners は学力の発達に応じた、学習方法が身につけていないし、知らないということである。Unsuccessful だけでなく Successful Learners までが語彙学習では、派生語などを利用したグルーピング、Reading では「本文全体から大意をつかむ」ということができている。つまり、学力差というよりは、むしろ Reading の指導で、文脈からの理解などの指導が、いかになされていないかを如実に表していると思われる。そういった指導を怠ってきたのは我々教師であり、その責任は我々自身にある。

(2) 3. 生徒の認知発達の程度や学力差で、使用できる学習方法が異なる。 個人間の学習方法使用の種類の差だけでなく、個人内での使用程度の差にも、今後さらに注目して調査する必要がある。PLT (Personal Learning Theory)

(3) 詳細にデータを再検討し、学力差に応じた学習方法を知り指導に活かしたい。

Maslow (1971) は、学習者が英語学習の意味を理解して、主体的に学習を進めるために、教師が何をなすべきかの視点 “humanistic education” の目標を、次の様に定めている。

The goals of this new “humanistic education”, according to Maslow, are to help the student become a self-directed learner who makes wise choices about his own learning, and...

そこで我々もまた、日常の授業の中で、生徒達に学習方法を学ばせることにより、学習意欲を持たせ自主学習を可能にさせなければならない。

本調査結果から、我々教師が日常の授業実線で、本当に効果が有るのか一抹の不安を抱きながら指導していた学習方法に関して、音読などいくつかの項目については効果があると、ある程度自信をもって指導できるようになることの意義は大きいと思っている。

12. 0. 今後の研究

1. 一般化の限界（抽出したサンプル）の克服
2. 各言語能力を抽出するテストの問題の研究
3. 最終的には、実験授業 (reading aloud, read & look up, recitation, oral interplitation) 等を、one sentence, one paragraph, discourse を利用して実験し、分散分析等を利用して、その効果を検証したい。

13. 0. 参考文献

Bialystock, Ellen. (1979) ‘The Role of Conscious Strategies in Second Language Proficiency,’

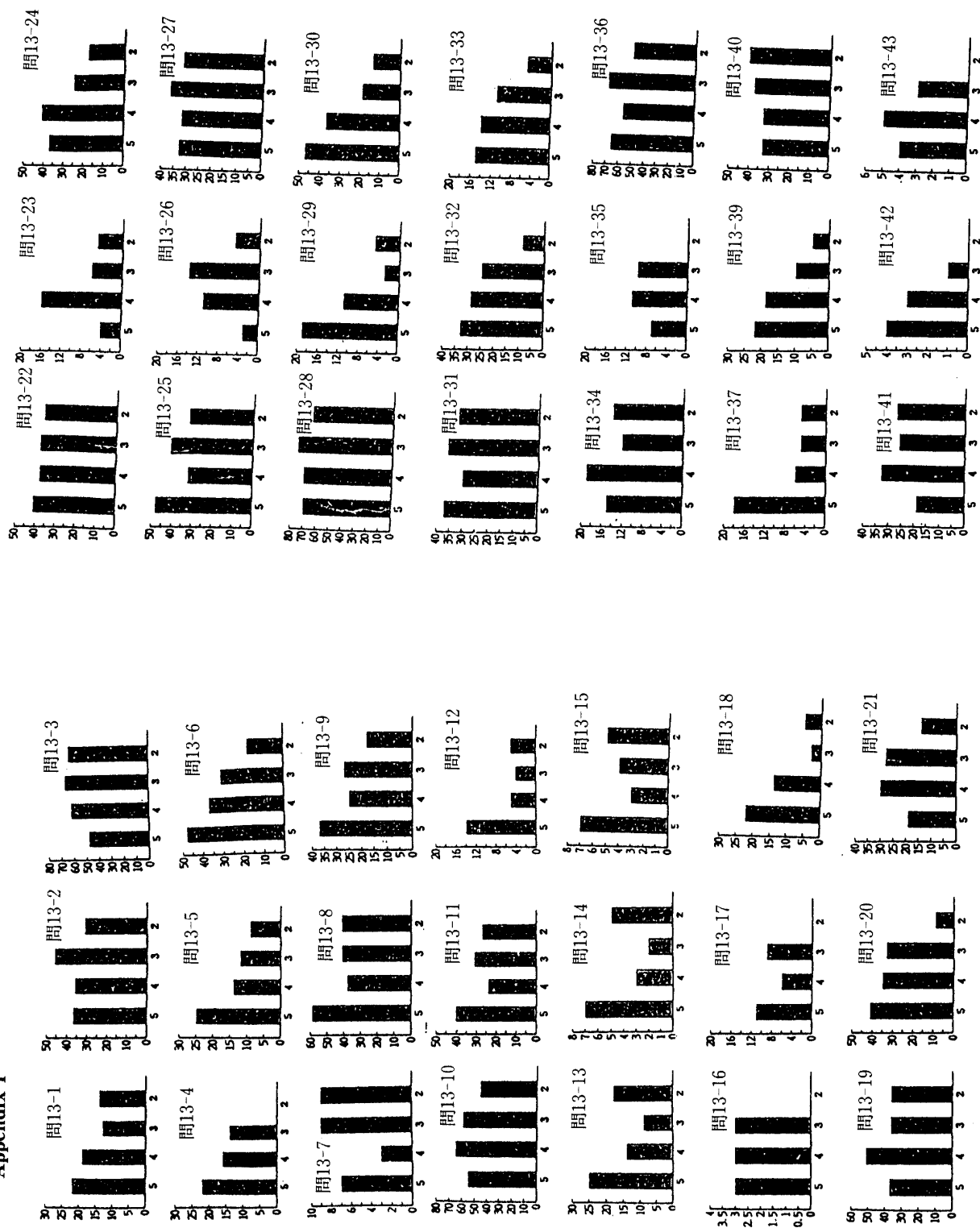
3 回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

- The Canadian Modern Language Review³⁵/3: 372-94.
- Carroll, J. B. (1974), 'Learning Theory for the Classroom Teacher,' G. A. Jarvis (ed), The Challenge of Communication,. ACTFL Review of Foreign Language Education, National Textbook Company.
- Chamot Anna Uhl (1987) 'The Learning Strategies of ESL Students,'
Learner Strategies in Language Learning. 71-84, Prentice-Hall International.
- Chamot Anna Uhl, Kupper Lisa, Interstate Research Associates, VA. (1989), 'Learning Strategies in Foreign Language Instruction', Foreign Language Annals, 22, No. 1.
- H. Dougras Brown (1987), Principles of Language Learning and Teaching, 2-nd edition. 78-98, 180-192.
- Jakobovits, L. A. (1970), Foreign Language Learning. Newbury House.
- A. H. Maslow (1971), The Further Reaches of Human Nature, the Viking Press, Chap. 13.
- O'Mally, J. Michael, Anna Uhl Chamot, Gloria Stewner-Manazanares, Lisa Kupper, and Rocco P. Russo. (1985). 'Learning strategies used by beginning and intermediate ESL students'. Language Learning, 35 (1): 21-46.
- O'Mally, J. Michael (1987), 'The Effects of Training in the Use of Learning Strategies on Acquiring English as a Second Language,' Learner Strategies in Language Learning. 133-144, Prentice-Hall International.
- Oxford Rebecca L, Lavine, Roberta Z, Crookall, David. (1989)
'Language Learning Strategies, the Communicative Approach, and their Classroom Implications,'
Foreign Language Annals, 22, No. 1.
- Rubin, Joan, et al. (1981) 'Study of Cognitive Processes in Second Language Learning' Applied Linguistics, Vol. 11, No. 2.
- . (1987) 'Learner Strategies : Theoretical Assumptions, Research History and Typology,' Learner Strayegies in Language Learning. 15-30. Prentice-Hall International.
- Thompson Irene (1987) 'Memory in Language Learning,' Learner Strategies in Language Learning. 43-56, Prentice-Hall International.
- Wenden, Anita L. (1985) 'Learner strategies.' TESOL Newsletter 19: 1-7
- . (1983) 'Facilitating Autonomy in Language Learning.' TESOL Newsletter
- . (1987) 'Conceptual Background and Utility,' Learner Strategies in Language Learning. 3-14, Prentice-Hall International.
- 青木 昭六他(1980)「英語の学力差と知的, 情意的, 学習習慣的な諸因子について」『三重大学教育学部研究紀要』第31巻第4号別刷
- 青木 昭六 (1985)『英語の評価論』大修館
- 近江 誠 (1984)『オーラル・インタープリテーション入門』—英語の深い読みと表現の指導— 大修館
- 近江 誠 (1988)『頭と心と体を使う 英語の学び方』研究社出版
- 小川芳夫訳/マイケル・ウェスト著 (1968)『困難な状況のもとにおける英語の教え方』 英潮社
- 國弘 正雄 (1970)『英語の話し方—同時通訳者の提言—』サイマル出版社
- 天満 美智子 (1989)『英文読解のストラテジー』大修館
- 松村 幹男編 (1988)『英語のリーディング』3版 大修館
- 橘堂 弘文 (1988)『学習意欲を喚起する指導法の考察 学力差の要因を英語学習に対する態度・意識・学習方法の実態調査から捉える—』

- 昭和63年度『内地留学生研究報告書』 大阪市教育委員会 pp. 43-56.
- (1989) “A Comparative Study of Good Learners and Slow Learners in TEFL”, 兵庫教育
大学 教科領域専攻 言語系コース 1989年12月
- (1990) “Learning Strategies Used by Good Language Learners”『中部地区英語教育学会紀要
19』1990. 5. 1. pp., 161-166.
- (1992) 「Reading Aloud の効果について(1) —実態調査結果からの分析—」『中部地区英語教育
学会紀要21』, 中部地区英語教育学会, pp., 241-246
- (1992) 「Reading Aloud の効果について(2) —指導実験による検証—」
『教育学研究紀要』第37巻 第2部 中国四国教育学会 (広島大学) pp.. 143-148

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

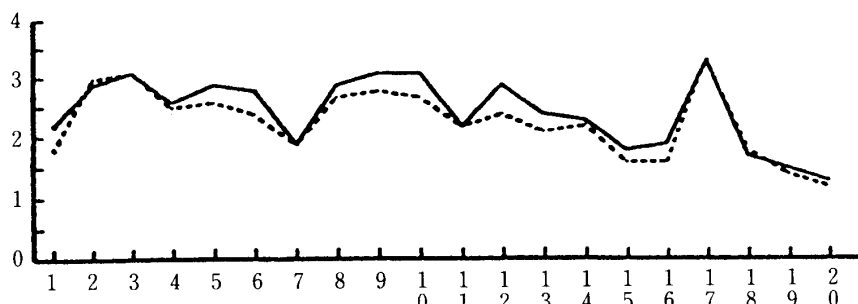
Appendix I



Appendix II

A・(学習と学習計画)

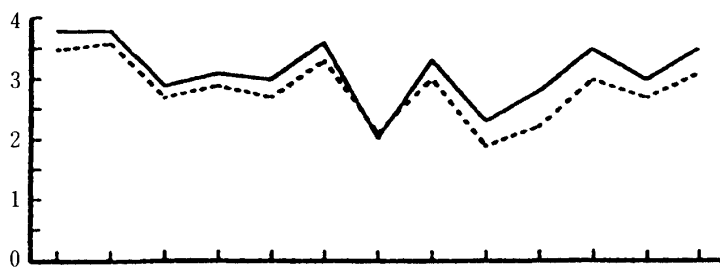
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
上位	22	29	3.1	2.6	2.9	2.8	1.9	2.9	3.1	3.1	2.2	2.9	2.4	2.3	1.8	1.9	3.3	1.7	1.5	1.3
下位	1.8	3.0	3.1	2.5	2.6	2.4	1.9	2.7	2.8	2.7	2.2	2.4	2.2	4.2	1.6	1.6	3.3	1.8	1.4	1.2



通信添削をしている。
塾・家庭教師を利用している。
友達と一緒に協力して学習する。
学習方法の指導をしてほしい。
テストの誤りは、帰宅後もう一度答案を検討する。
反復学習する。
復習を中心にする。
子習で疑問点や注意すべきところをチェックする。
予習を中心にする。
友達の見解を参考に勉強方法を選択する。
先生の見解を参考に勉強方法を選択する。
自分の意志で勉強方法を選択する。
自分のペースを守ってやる。
友達の見解を参考にペースを決める。
先生の見解を参考にペースを決める。
先生や授業のペースに合わせる。
柔軟に学習計画を変える。
テスト直前にまとめて集中的に学習する。
気分のはった時一気にやる。
学習は計画的にする。

B・(ノート・テーキング)

	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
上位	3.8	3.8	2.9	3.1	3.1	3.6	2.0	3.3	2.3	2.8	3.5	3.0	3.5
下位	3.5	3.6	2.7	2.9	2.7	3.3	2.1	3.0	1.9	2.2	3.0	2.7	3.1

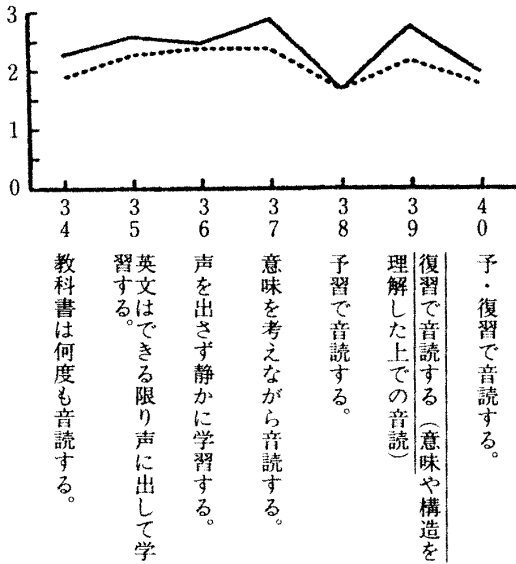


復習にも必ず利用する。
ノートに棒線や記号、図を用いて記入する。
別に単語帳やカードなど作り利用する。
子習で疑問点を記入しておく。
重要構文や新出語彙を記入する。
英文の大意や要点のみ書いておく。
全文和訳を書く。
教科書の本文(英文)は必ずうつす。
授業中ノートに教師の指導事項を、要点のみ記入する。
授業中ノートに教師の指導事項を、全部記入する。
授業中ノートを取る。
ノートを必ず作る。

3回の実態調査とその指導実験による Successful Language Learners' Strategies の検証

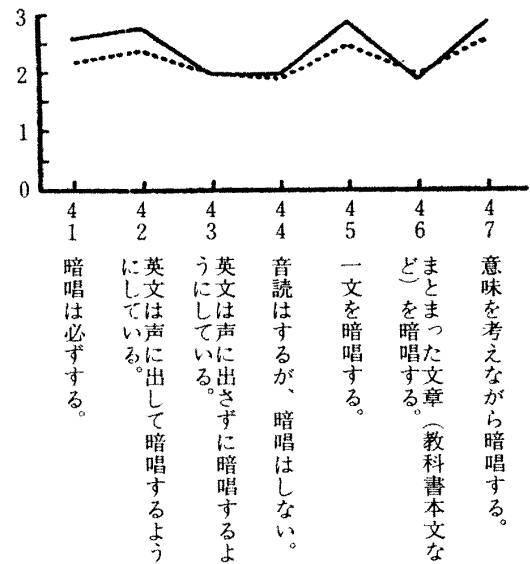
C・(音読)

	34	35	36	37	38	39	40
上位	2.3	2.6	2.5	2.9	1.7	2.8	2.0
下位	1.9	2.3	2.4	2.4	1.7	2.2	1.8



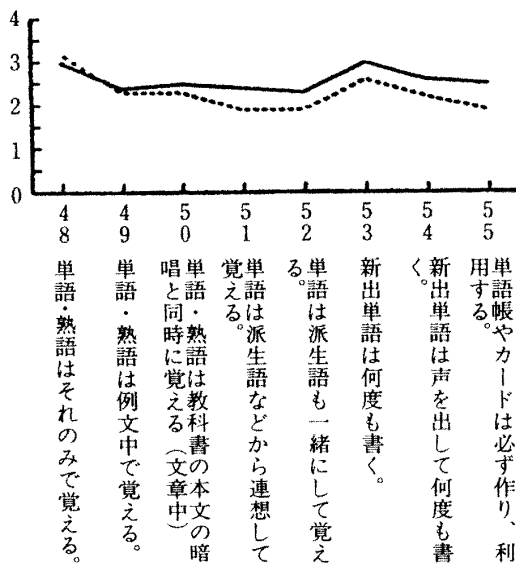
D・(暗唱)

	41	42	43	44	45	46	47
上位	2.6	2.8	2.0	2.0	2.9	1.9	2.9
下位	2.2	2.4	2.0	1.9	2.5	2.0	2.6



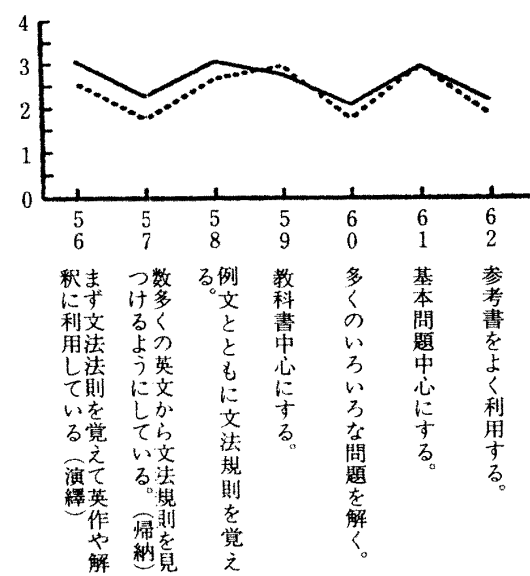
E・(語彙学習)

	48	49	50	51	52	53	54	55
上位	3.0	2.4	2.5	2.4	2.3	3.0	2.6	2.5
下位	3.2	2.3	2.3	1.9	1.9	2.6	2.2	1.9



F・(文法学習)

	56	57	58	59	60	61	62
上位	3.1	2.3	3.1	2.8	2.1	3.0	2.2
下位	2.6	1.8	2.7	3.0	1.8	3.0	1.9



テスト平均20点満点を5点に勘算